

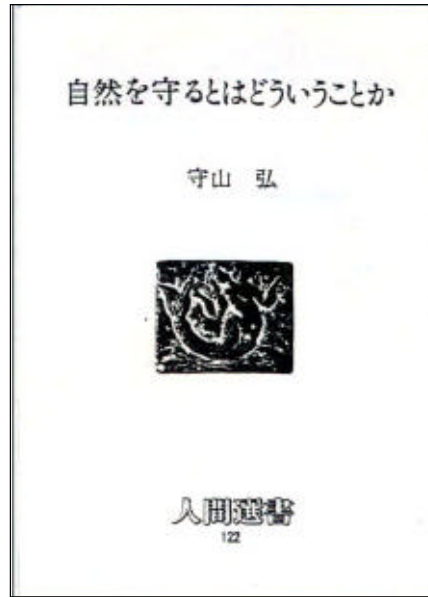
本

書は、農業に結びついて維持されてきた雑木林に焦点を当て、そこに住む生物だけでなく雑木林に関わる人間のくらしや文化を含めた保護を呼びかけたものである。

わが国に現存する雑木林は、原生自然である常緑広葉樹林を伐採した後の二次林（落葉広葉樹林）であるものが多い。このような二次林は、原生自然の代償植生であるという考え方故に（自然保護運動が高まっているにもかかわらず）雑木林は過小評価されているが、単なる代償植生でない事をいくつかの視点から論じ、雑木林の重要性を述べている。

そのなかで特に興味を感じたのは、第2章の「雑木林に結びついて生き残った生物」である。落葉広葉樹林に適応して特殊化した生物（春植物や、ギフチョウなどエネルギーを摂取する期間が春先に集中している為スプリング・エフェメラルと呼ばれる）の生活史や生態が分かりやすくまとめられている。そして移動速度、分布状態などのデータを検討し、人間の働き

自然を守るとはどういうことか



守山弘著

発行◆(社)農山漁村文化協会  
人間選書122 ◆定価◆1,550円

かけの結果できた落葉広葉樹林が天然性の落葉広葉樹林に引き続く形で存在し、そこに生存してきた生物は古い時代の生き残り（遺存種）であり、わが国の地史の生き証人として学術的な価値があると共に、それらの生存環境として、雑木林も守られるべき価値が

あると結論づけている。

本書は、小見出し毎の適度な量の文章で構成されており、丁寧な話の進め方で、思ったよりも読みやすく感じられた。知識が無くても学習意欲があれば読み進められる一冊ではないかと思う。（大阪支社管理室・馬場純子）

R eport

新人研修が行われました

1996.6.10

研修は社長の話で始まった。今後は各々の専門性に加えて総合性を兼ね備えた幅広い業務ができるよう、普段から横のつながりを大切にしようというものであった。

その後各調査チームのチームリーダーよりそれぞれ調査室で扱う生き物の基礎知識や調査方法、業務の流れについての解説があった。また、今後どのような業務が増え、我々に求められる技術・知識がどう変化していくかという話がされた。レクチャーは参加者との対話形式であったり、落語にして道具解説がされたりと、

緊張感を持って真剣に、かつ楽しい雰囲気が進められた。

普段は現地調査に出ていることが多く、顔を合わせることの少ない調査室のスタッフも集まっており、新人以外の参加者が多い研修だった。自分の専門分野に限らず、他分野の技術や知識が関連していることを理解し身につけることの必要性を、誰もが感じているためだろう。

私にとって、今後の課題と目標の1つが示された研修となった。

（本社企画室・中村兼吉）

於◆神奈川県三浦市小網代の森 主催◆東京蜘蛛談話会

## 東京蜘蛛談話会採集観察会



東

京蜘蛛談話会の会員ならば、蜘蛛に対する関心が高いという命題は、正しいだろうか。少なくとも、私の場合にはあてはまらない。私はただ、知人から誘われて入会しただけである。だから、研究発表会には参加したことがない。研究誌「KISHIDAIA」も見出しぐらいしか読んでいない。それでも、入会前はワカバグモさえ知らなかった私が、今はワカバグモぐらいならわかるようになっていく。採集観察会には参加しているおかげである。

採集観察会は、年度ごとに東京近辺を対象地を1か所定め、春夏秋冬の4回開かれる。採集観察会の主な目的は2つある。1つは各自の研究材料を得ること、もう1つは、対象地の蜘蛛相、つまりどのような種類の蜘蛛が生息しているかを明らかにすることである。しかし、研究材料を得るといっても、何も研究していない私には必要がない。蜘蛛相を明らかにするといっても、ワカバグモぐらいしかわからない私の出番はない。

毎回、昼の休憩時と終了前に、全員で当日、記録・採集した蜘蛛の種類を照合し、目録を作成しているが、この時私は、何かを食べているか、寝ているか、空を仰いでいる。それでも、欠かさず参加しているのは、世話役の人たちから蜘蛛の生態などについて興味深い話を、生きた実物を目の前にして聞くことができるからである。それに、蜘蛛の採集や観察をしなかったからといって、そのことで何らのとがめを受けることはないという、ズボラリズムの精神に裏打ちされた会だからである。

さ

て、1年間にわたる採集観察会の成果は、その年度の担当者によってまとめられ、研究誌「KISHIDAIA」に発表される。

こうして東京蜘蛛談話会は、南関東各地の蜘蛛相を次第に明らかにしてきている。近年、生物の生息環境を確保するということが重視されるようになってきているが、そのためにはまず、基礎的なデータとして、その地域にどのような生物が生息しているのかという情報が整備されなければならない。採集観察会の成果は、蜘蛛の生息についての基礎的なデータとなるものである。また、基礎的なデータを生産するという行為は、科学の発展に寄与するものでもある。あの天文・物理史上の大発見であるケプラーの法則も、チコ・プラーエが長年にわたって生産した膨大な観測データがあればこそ、導き出すことができたのである。将来、東京蜘蛛談話会が生産したデータを用いて、動物学史に残る大発見をやらせてくれる人が現れるかもしれない。そのデータの生産者として、私の名前も研究誌「KISHIDAIA」に記録されているのである。何と名譽なことではないか。

(本社業務推進室・中野隆雄)

1996年度開催日……1996.5.19  
7.14  
10.20  
1997.2.23

〈東京蜘蛛談話会〉事務局◆〒350 埼玉県川越市上戸91-3 瀬尾荘202 (平松毅久方)